

受験番号				
------	--	--	--	--

人 文 ・ 社 会 科 学

問 題 冊 子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題(1-40)があります。配点は80点満点です。
解答カードには表裏あわせて50の解答欄がありますが、41以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味70分です。資料を読む時間と問題を解く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。解答のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、**解答カード**の定められた枠の中に**鉛筆**を用いてマークして下さい。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの**問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

2023年5月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが「5類感染症」に変更され、海外旅行に出かける日本人出国者数も順調に回復しつつある。海外渡航が極めて限定的であった約120年前、明治時代の文豪である夏目漱石が西洋と東洋の両社会で経験した事柄を振り返りながら、現代人である我々がそこから何を学ぶことができるかを考えてみたい。

散歩する漱石

英国の首都ロンドンの中心部には、5つの広大な公園がある。全て王立公園であり、かつては王室の私庭や猟場であったが、漱石が留学していた1900年当時、すでに一般に開放されていた。漱石もロンドンの公園へよく散歩に出かけており、当時の日記には公園の名前が散見できる。漱石は特に整然とした芝生の美しさに魅せられたようである。漱石がロンドンに留学していたのは1902年12月までの2年間で、日本が日清戦争に勝利し、植民地主義や帝国主義を拡大させ、日露戦争へと邁進しつつある時期でもあった。折しも、漱石の在英中にはロシアの極東進出に対抗すべく日英同盟が締結されている。

『文学論』（1907年）によると、ロンドンに暮らした2年間は、漱石の生涯で最も不愉快な2年間だったということである。特に渡英後の数か月は、文化や価値観の違いから不愉快な出来事に遭遇することが多く、公園を散歩することが鬱屈した気分の漱石にとって大きな慰藉^{しや}になっていた。漱石が最も頻繁に足を運んだ公園は、日比谷公園の約9倍の面積を持つハイド・パークである。しかし、漱石が最も気に入っていたのは王立公園ではなく、郊外に位置するハムステッド・ヒースやデンマーク・ヒルであった。ハムステッド・ヒースを訪れたのは、ロンドン到着から凡そ1か月後の1900年11月23日のことである。日記には、「Hampstead Heath ヲ見ル愉快ナリ 巡査ニ会ス水夫トシテ日本ニ居リタル者ナリ日本ヲ頻ニホ（メ）タリ」とある。この時の漱石は、ユダヤ人が多く居住するウェスト・ハムステッドの下宿に移ったばかりであった。ちなみに、漱石は在英中4度の引越を経験している。

ウェスト・ハムステッドの下宿のことは、『永日小品』（1909年）にも記載がある。漱石はこの下宿に3週間余り住み、別の下宿に転居している。翌年1月10日に下宿から2マイル（約3.2キロメートル）ほど離れたデンマーク・ヒルを訪れた時も、漱石はハムステッド・ヒースのことを思い出し、日記に「倫敦^{ろんどん}（倫敦の誤り）も Denmark Hill 附近は閑静^{いささ}にて聊か風雅の心を喚起するに足る Hampstead Heath に長尾氏と散歩セしときと今日が尤も倫敦^{もつと}に来てよりの愉快なる日なり」と書いている。

ここで、ロンドンの地理について少し説明しておこう。ロンドンは、経済の要所である「シティ・オブ・ロンドン（以下、シティ）」と、それを取り巻く行政区から成り立っており、正式には「グレーター・ロンドン」と呼ばれている。「グレーター・ロンドン」の中でも、特に政治や経済の中心になっている地区を「セントラル・ロンドン」と呼び、マンション・ハウス

(ロンドン市長の官邸)やセント・ポール大聖堂、証券取引所がある「シティ」と、テムズ川の北側に位置するバッキンガム宮殿や国会議事堂、著名な劇場が集まる「ウェスト・エンド」と、倉庫街の「サウス・バンク」とに分かれている。漱石が好んだハムステッド・ヒースは、「グレーター・ロンドン」の周辺に位置している。この辺一帯は「ハムステッド・ガーデン・サバープ」と呼ばれ、当時のロンドンで深刻な問題となっていた煙害などの環境破壊とは無縁な、緑豊かな理想の住宅地として華々しく宣伝されていた。

セントラル・ロンドンは、標高 50 フィート (15 メートル) と低く、中央をテムズ川が流れ、国会議事堂などの主要な建築物はテムズ川の周辺に集中している。つまり、これらの建築物は、大英帝国の繁栄の象徴でありながら、地理的には最も低い場所にあったということである。それに対して、ハムステッドは中心からは大きく外れるが、ロンドンの街を見下ろす西北の高台にあった。なかでも、ハムステッド・ヒースはグレーター・ロンドンの最も海拔の高い場所にあり、標高 430 フィート (131 メートル) である。

大学では建築学を専攻したいと望んでいた漱石は、ハムステッド・ヒースを訪れるほぼ 1 週間前に、セント・ポール大聖堂を見物に行っている。セント・ポール大聖堂のドームの高さは 365 フィート (111 メートル) である。漱石は、この時、日本人にセント・ポール大聖堂のような建造物を作ることは不可能だと論じた友人の言葉を思い出し、その高さと優美さに圧倒されたに違いない。ハムステッド・ヒースからは、そのドームを遠く眼下に望むことができたのである。漱石は徒歩で街を体感するだけでなく、俯瞰的にロンドンという大都市を視界に収めようとしていたのである。

中心から周縁へ

ミシェル・ド・セルトーは『日常実践のポイエティーク』(1980 年)において、「歩く行為」とは「歩行者が地理的システムを自分のものに^{する}プロセス」であり、「自分のいる位置をもとにして、近くと遠くを、^{こことあそこ}をつくりだす」行為であると述べている。また、「歩くということ、それは場を失うということだ。それは、その場を不在にし、^{フローズン}自分のものを探し求めてゆくはてしないプロセスである」とも説明している。散歩を日課としていた漱石は、広大なロンドンの街を自らの足で歩きまわること、大英帝国という国家の成り立ちを理解し、大都市ロンドンにおける「^{フローズン}自分のもの」と呼べる「場」を発見しようとしていたに違いない。そのことは、度重なる下宿の引越にも端的に表れている。都市を徘徊する漱石の「探索 (explore)」は、「^{こことあそこ}」を見極めながら、地図上に渦を描くようにロンドンという街の周縁へと向かっていった。

心理学者のジグムント・フロイトも最晩年にハムステッドに居を構え、診療所を開き患者の治療に当たっている。ユダヤ人の一家に生まれたフロイトがイギリスに移り住んだのは、ナチ

ス・ドイツの迫害を恐れていたことである。「シティ」が近代人の意識、すなわち自我を象徴する場所であるとしたら、ハムステッドは意識の周辺、すなわち無意識の領域を意味している。フロイトがこの場所を治療の場と考えたのも故無きことではあるまい。漱石もまた「シティ（自我）」を離れ、無意識の領域に足を踏み入れようとしたのである。ちなみに、漱石がロンドンに到着した年にフロイトは『夢判断』（1900年）を発表しており、後年、漱石も『夢十夜』（1908年）という短編を書いている。

漱石が文部省第一回給費留学生として、英語研究のためロンドンに留学したのは33歳の時である。帰国後は、母校の東京帝国大学の英語講師として教壇に立っている。いわば、漱石は一貫してエリートの道を歩んでいたわけで、高等教育を受けた知識人としての自負もあったはずである。しかしながら、ロンドン中心部で漱石が経験したのは、「日本」及び「日本人」という存在の希薄性だったのである。1900年12月26日付の妻鏡子宛の書簡には、「倫敦の中央にては日本人杯^{など}を珍らしそうに顧みるもの一人も無之皆非常に自身の事のみ^{きょうこ}に急がしき有様に候さすが世界の大都会丈有之候」とある。さらに、親友の正岡子規宛の書簡を収録した『倫敦消息』（1901年）では、「此間或る所の店に立つて見て居たら後ろから二人の女が来て“least poor Chinese”と評して行つた。（中略）或る公園で男女二人連があれば支那人だいや日本人だと争つて居たのを聞いた事がある」というエピソードを紹介している。

漱石をさらに憂鬱にしたのは、自らの身体に向けられる「西洋人」の眼差しを内在化させられたことである。漱石は、1901年1月22日付の妻宛の書簡で、「日本に居る内はかく迄黄色とは思はざりしが当地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつかし申候其上背が低く見られた物には無之非常に肩身が狭く候向ふから妙な奴が来たと思ふと自分の影が大きな鏡に写つて居つたり杯^{など}する事毎々有之候」と書いている。漱石は天然痘の後遺症による顔の痘痕^{あばた}や背丈に対して、日本にいた頃から強い劣等感を持っていた。ロンドンの街中で漱石を驚愕させた「大きな鏡」は、さわめて高価で高度な技術が必要であり、明治期の日本ではほとんど流通していなかった。つまり、渡英前の漱石は「妙な奴」と感じた自らの容姿や肌の色などを他者の視点から眺める眼差しを持ち得なかったのである。さらに、1901年4月以降に書かれた「断片」には、「我々はボツトデの田舎者のアンボンタンの山家猿のチンチクリンの土気色の不可思議ナ人間デアルカラ西洋人から馬鹿にされるは尤^{もつとも}だ」といった自虐的な記述すら認められる。

ここで漱石が「我々」と呼んでいるのは、「西洋人」に対する「東洋人」を指している。「中心」対「周縁」、「西洋」対「東洋」という地理的座標軸に、当時の世界情勢と己の立場を重ねて位置づけ、漱石は「日本人」とであると同時に「東洋人」であることを強く意識せざるを得なかった。当時のロンドンには多くの中国人が居住しており、日本人と混同されることも少なくなく、このことを良く思わない在英邦人もいたが、漱石は1901年3月15日の日記に「支那人ハ日本人ヨリモ遙カニ名誉アル国民ナリ、只不幸ニシテ目下不振ノ有様ニ沈^{ちんりん}淪セルナリ、心ア

ル人ハ日本人ト呼バルルヨリモ支那人ト云ハルルヲ名誉トスベキナリ」と書いており、中国人の置かれた境遇に深い同情を寄せている。漱石は自らの留學生活が日清戦争の賠償金によるものであることを忘れるわけにはいかなかったのである。

19世紀の大英帝国は、世界で最初に産業革命と自由貿易を成功させ、世界最強の海軍を持ち、植民地主義のもとヨーロッパ社会の中心に君臨していた。しかしながら、20世紀を迎える頃には、労働者階級と資本家階級の対立が激しくなり、大英帝国の栄光の象徴であったヴィクトリア女王が逝去し、ダイヤモンドや金の利権にからむ南アフリカ戦争（ブール戦争）が勃発するなど、英国内には重苦しい雰囲気が漂っていた。漱石が女王への哀悼の意を示すために黒手袋を買った店の店員の言葉―「The new century has opened rather inauspiciously. (注：inauspiciously 不吉な)」が日記（1901年1月23日）には紹介されている。「A」という四字熟語があるように、時代の転換期を迎えた大英帝国に身を置くことで、漱石は富国強兵と植民地政策を掲げる大日本帝国という国の行く末を危惧していたに違いない。

漱石の懸念は、青春小説と呼ばれる『三四郎』（1908年）の次の場面に反映されている。この作品は、主人公の小川三四郎が大学に入学するために、汽車で熊本から上京する場面から始まっている。途中、偶然汽車に乗り合わせた男性と、日本の将来について意見交換をする場面が出てくる。舞台は日露戦争直後である。「是からは日本も段々発展するでせう」と言う三四郎に対して、男性は「亡びるね」と一蹴するのである。そして、「熊本より東京は広い。東京より日本は広い」「日本より頭の中の方が広いでせう」と述べ、「囚はれちや駄目だ。いくら日本の為めを思つたつて最^{ひい}眞^きの引き倒しになる許^{ばか}りだ」と若い三四郎に警告するのである。ちなみに、三四郎のような「青年」が小説に登場してくるのは、近代になってからのことである。ミシェル・ド・セルトーは、『文化の政治学』（1974年）の中で、「青年^{ニョウ}というものは中等教育の拡大や技術的教育、徴兵制の普遍化、さらには詩的な『青春』といった文学的キャラクターの形成とともに、まちがないなく19世紀に生誕したものであろう」と分析している。実際、漱石の『三四郎』に対抗する形で、森鷗外が小説『青年』（1910-11年）を発表している。当時、東京はすでに260万人の人口を有する大都会であり、その多くが地方出身者であった。つまり、『三四郎』は地方から上京する青年にとって東京での生活を紹介する指南書であり、共通語としての日本語を学ぶ教科書でもあったわけである。鷗外の『青年』の主人公も、地方出身者でありながら小説で習い覚えた東京語を流暢に話している。このように、明治期の新聞や小説は、共通語を地方に伝播する媒体となっていたのである。いわば、言語による中央集権化である。

『三四郎』の「囚はれちや駄目だ」という男性の警告は、西洋人を規範として、その上に東洋人である自己を投影して、自己同一性を確立しようとした漱石自身に向けられた自戒の言葉でもあったと言って良い。他者の言動や態度に敏感に反応した漱石は、他者への印象を操作し

ようと常に服装には気を配っていた。だが、「此国では衣服では人の高下が分らない。牛肉配^{など}達杯が日曜になるとシルク、ハットでフロックコート杯を着て澄して居る」と『倫敦消息』に書いている。漱石が英国に暮らしていた時期は、大量の労働者がロンドンの街に流れ込み、新興階級を形成しつつあった。一方で、日記に「英国人ナレバトテ文学上ノ知識ニ於テ必ズシモ我ヨリ上ナリト思フナカレ」（1901年1月12日）と書いているように、また「英国人ニテモ普通ノモノハ accent ヲ間違ヘタリ pronunciation ヲ取違ヘタリスルコト目珍シカラズ」（同年1月18日）とも述べているように、身体的には相違があっても、教養というものには民族的な格差が存在しないことに漱石は気づいていたのである。やがて、5番目の下宿に移った後は、『文学論』執筆のため下宿に閉じ籠るようになる。

「名づけ」と認識

「漱石」というペンネームは、唐代の歴史書『晋書』に登場する故事「漱石枕流」に由来する。「石に枕し流れに^{くちす}漱がん」と言うべきところを「石に漱ぎ流れに枕せん」と間違い、誤りを指摘されると「流れに枕するゆゑんは、その耳を洗はんと欲し、石に漱ぐゆゑんは、その^{みが}齒を礪かんと欲すればなり」と説明したということである。本名は、夏目金之助である。「金之助」という名前は、誕生日が中国の陰陽五行説に基づく四柱推命の^{かのえさる}「庚申」に当たり、この日に生まれた子どもは大泥棒になると言われ、厄除けとして「金」の字をつけるのが良いという俗信に由来している。漱石は両親が高齢になってからの子どもで1歳の時に塩原昌之助とやす夫婦の養子となり、およそ8年後には養父母の離婚を契機に実家に戻されたが、夏目家の戸籍への復籍が叶うのは21歳になる直前のことであった。つまり、漱石は多感な少年期と青年期を夏目家に身を置きながら、塩原姓を名乗るという複雑な境遇に置かれていたのである。

漱石は留学生生活を不愉快な2年間と回顧していたが、一方で、日本では味わえない解放感を覚えることもあったはずである。1901年8月3日に池田菊苗とともに訪れたカーライル博物館のビクターズ・ブックには、「K. Natsume」という署名が残っている。西洋社会では日本人の姓名を倒置させて使用するのが常道だが、漱石は下の名前で呼ばれ、自らも西洋式に署名するたびに、個人を表象する固有名詞は名字ではなく、名前であることを実感したはずである。『吾輩は猫である』（1905-06年）は、漱石に職業作家になることを決意させた記念碑的な作品であるが、個人が「名称」から解放される快感が「吾輩は猫である。名前はまだ無い」という冒頭文に簡潔に表現されている。作中、猫は一貫して無名で、それゆえ自由に世界を動き回り、人間社会を容赦なく批評するのである。猫以外の登場人物には名前があり、飼い主の中学校の英語教師は「^{ちんの くしゃみ}珍野苦沙弥」、成金の実業家は「金田」、その娘は「富子」と命名されている。『吾輩は猫である』の脱稿から約1年後に、漱石は東京帝国大学の職を辞し、朝日新聞社に入社する。「教授」や「博士」という肩書きではなく、「新聞屋」になることを選択したのである。

「入社辞」(『東京朝日新聞』1907年5月3日)には、「新聞屋が商売ならば、大学屋も商売である。(中略)新聞が下卑た商売であれば大学も下卑た商売である。只個人として営業してゐるのと、御上で御営業になるのとの差^だ丈けである」と作家としての気概が表明されている。

そもそも「名づけ」には、どのような意味や役割があるのだろうか。『知覚の現象学』(1945年)において、モーリス・メルロ＝ポンティは「対象が再認識されてしかる後にその名が呼ばれるのではない。呼称は再認そのものである」とし、たとえば「幼児にとっては対象が名づけられたとき、初めてそれが知られるのであり、名称は対象の本質であり、その色彩や形と同じ資格で対象のなかに宿るのである。科学以前の考え方にとっては、対象を名づけることは、それを存在せしめ、もしくはそれを変容せしめることに等しい」と述べている。「科学以前の考え方」として、すぐに思い浮かぶものに「言^{こと}霊^{だま}思想」がある。「言霊」とは言葉には神秘的な霊力が宿っており、発せられた通りに事象が起こるという考え方である。8世紀に成立した日本最古の和歌集『万葉集』にも「言霊」が登場する和歌が残っている。さらに、「言霊」が悪い事柄を引き起こす可能性がある、それを「忌み言葉」と呼ぶこともある。忌み言葉は、縁起の悪い出来事を連想させてしまうので、使用場面が限られたり、別の単語に言い換えられたりする。このように、事物に与えられた「名称」は事物の存在そのものであり、「名称」が与えられて、我々は初めてその存在を本当の意味で認識するのである。国や地域、文化によって、対象を表現したり認識したりする言葉が違うのも、そのためである。日本語では「米」は状態によって「^{もみ}粳、苗、稲、米、ご飯」などに区別されるが、英語ではriceと総称される。逆に、英語ではwheat(小麦)とbarley(大麦)は別の単語だが、日本語では大小の違いのみである。

「名づけ」は見たり、手に取ったりできるもの、すなわち物質的なことだけが対象ではない。例えば、1873年から日本では太陰暦と不定時法に代わって太陽暦と定時法が採用されている。暦や時法の変更は、前年に新橋と横浜間に鉄道が敷設されたことと関係がある。鉄道が開通した年は、群馬県富岡に日本初の官営製糸場が開業した年でもあり、鉄道は生糸を運搬する輸送ルートを中心であった。鉄道の定時運行には定時法の「時計」が必要であり、時計は駅舎だけでなく学校や工場などにも設置され、明治末期には一般の家庭にも普及する。「時計」の普及によって、労働は勤務時間に拘束され、時間は貨幣価値に換算されるようになる。時間は貨幣と等価であるから、無駄遣いは厳しく戒められ、工場では「効率」が重視され、学校では「遅刻」が問題視される。「効率」も「遅刻」も、明治時代の時間意識の変革によって新しく「名づけ」られた概念なのである。

「ころ」の時代

解剖学者の養老孟司は、『身体の文学史』(1997年)の中で「明治大正期の文学は、江戸以来の唯心論を無意識に継ぐと同時に、社会制度にしたがって、心理主義という欧化を行ない、

『身体を排除した』のである」と指摘している。また、「心理と身体の社会的な舞台を、まったく分離してしまった。文学は心理主義となり、身体はいわば、軍と病院になった」とも述べている。明治期の日本人の「身体」は厳しい統制下に置かれていたと言って良い。その例が『三四郎』に登場する運動会である。会場の入口には日の丸とイギリスの国旗が交差して掲揚しており、三四郎は「日英同盟と大学の陸上運動会とはどう云ふ関係があるか」と不思議に思う。更に、運動会においては、競技の結果が細かく計測され記録され掲示される。三浦雅士の『身体の零度』（1994年）によれば、日本における最初の運動会は1883年の東京大学における陸上運動会であるが、その起源は1874年の海軍兵学寮で行われた競闘遊戯会にまで遡る。つまり、身体を鍛錬し計測し管理する発想は、軍国主義そのものなのである。運動会は、その後、重要な学校行事となり、学校には体操場の設置が義務づけられ、体操（体育）という科目ができる。富国强兵という明治政府の理想を実現するために「身体」が改造されていくのである。

一方、漱石が一貫して小説に描き出そうとしたのは、代表作の『こころ』（1914年）が示唆するように「心」の優位性であった。『三四郎』に続いて執筆された『それから』（1909年）は、「頭」に対する「心」の優越性を描いた作品である。主人公の長井代助は、多額納税者の娘との結婚を勧める実業家の父親と兄に逆らって、友人の妻である三千代との結婚を選ぶ。資産家の娘との婚姻は長井家に物理的な利益をもたらす「頭」による結婚だが、三千代との結婚は「心」には適っても何の利益も生み出さず、倫理的な制裁を受ける危険性をはらんでいる。それでも代助は「人の掟に背く恋」を貫く決心をするのである。「新聞屋」であることを選んだ漱石にとって、「頭」や「身体」は国家によって容易に管理されるものだが、「心」は国家が管理しようとして唯一できないものであり、「心」を描くことこそが小説の主眼であり、小説家の使命であると考えたのである。

「心」は時に不可解で、流動的である。『催眠術の日本近代』（1997年）の著者である一柳廣孝によると、1903年以降の日本で催眠術が大ブームになっている。近代人にとって「心」は「頭」では理解できない未知なる領域であり、ある意味で不気味な異界だったのである。『こころ』の登場人物である「先生」も、大学生の「私」に対して「そんな鑄型に入れたやうな悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が出来ないんです」と語っている。実際、「先生」は親友Kを出し抜いてKが恋慕するお嬢さんと結婚するという形で、自らの「心」に裏切られてしまうのである。漱石が『心』の初刊本（1914年）の背表紙に漢字ではなく「こころ」と平仮名書きで表記したのは、「心」の「B」を示す意図があったのかもしれない。

抵抗としての身体

漱石の小説の主眼は「心」であるが、「身体」を小説に描かなかったわけではない。むしろ、漱石の作品に外国人が登場してくる場合、常に身体的な差異が強調されている。特に、西洋人の洗練された肉体美を多くの作品で描写している。例えば、『三四郎』では、上京する途中駅のホームで主人公は「派手な綺麗な西洋人」を見る。そして、「^{すこぶ}頗る上等に見える。三四郎は一生懸命に見惚^ほれてゐた。是では威張^{もった}るのも尤もだ」「自分が西洋に行つて、こんな人の中に這入つたら定めし肩身の狭い事だらう」と思うのである。ただし、漱石は西洋人の「身体」を描写するのみで、作中で彼らに語らせることはない。

英国留学から7年後の1909年9月2日から10月14日まで、漱石は南満州鉄道株式会社（以下、満鉄）の二代目総裁である中村是公の招きで、中国の大連、旅順、奉天、撫順、朝鮮半島の平壤、京城、釜山などを訪れている。漱石にとっては、2度目の海外渡航であり、今度は西洋ではなく、中国人や朝鮮人の生活を間近に観察し、東洋の現状を知る機会であったと言える。満鉄は1906年の設立で、日本の大陸支配を拡大するための半官半民の国策会社である。日露戦争の勝利により獲得した東清鉄道（長春－旅順間）やその支線、撫順・煙台炭鉱などを経営の母体とし、社員数6,914人、資本金2億円で発足した。英国の植民地経営に倣い、東インド会社を手本とした会社組織であった。C、日本は満州に中国大陆進出の拠点築き、帝国主義を繰り広げようとしていたのである。漱石は急性胃炎に悩まされつつも精神的に満鉄訪問の日程をこなし、帰国後は51回にわたって紀行文『満韓ところどころ』（1909年）を「東京朝日新聞」に発表している。

『満韓ところどころ』をめぐるのは、アジア民族に対する漱石の差別意識を指摘する論考が目立ち、小説と比較して識者の評価は低い。実際、^{クレー}「苦力」や「チヤン」といった蔑称や、「汚らしい」「見苦しい」「不体裁」「無神経」など中国人に対する差別的な表現が多用されている。「大阪朝日新聞」（1909年10月18日）に掲載された「満韓視察」でも、漱石は「成程日本人は頼もしき国民だと云ふ気が起きます従つて何処に行つても肩身が広くて心持が好いです之に反して支那人や朝鮮人を見ると甚だ気の毒になる、幸ひにして日本人に生れました故幸福だと思ひました」と語っており、日露戦争に勝利した日本人の傲慢さが感じられる。

満州での滞在は、多くの点でロンドン留学とは異なっていた。例えば、漱石は徒歩でなく、「東京の真中でも容易に見る事の出来ない位、新しい綺麗な」馬車で街を移動する。宿泊先も下宿ではなく、満鉄が所有する高級ホテルである。勿論、漱石は満鉄の賓客であるから、こうした待遇は至極当然とは言える。『満韓ところどころ』には国際性豊かな大連という街の華やかさ、満鉄本社や総裁社宅、中央試験場などの満鉄傘下の近代的な建築物の数々、そして、ベースボール大会や舞踏会、会員制の高級倶楽部などを享受する満鉄社員たちの豪奢な生活ぶりが随所に描かれている。

満鉄総裁の中村是公は大学予備門時代からの漱石の旧友だが、『漱石の思ひ出』（1929年）の中で妻の鏡子が語っているように、漱石の満州行には「人がよく知らない満鉄の事業や何かの紹介をやらせよう」という目論見があったものと思われる。つまり、漱石は当時の最大メディアである新聞紙上で、自主独立であるべき「新聞屋」が国策会社の宣伝を引き受けてしまった形になったのである。小説『三四郎』が地方出身者にとっての東京案内だとすれば、『満韓ところどころ』は「王道楽土」を夢見る日本人にとっての観光名所案内であったと言って良い。漱石は、日露戦争に従軍した中尉の案内で、旅順の二〇三高地などの戦跡にも足を運んでいる。日本の傀儡政権である満州国の建国は1932年のことであり、漱石の没後から16年後のことである。満鉄発足前の1905年に満州に在住した日本人の数は約5,000人であったが、満州事変の前年の1930年には約24万人にまで増加しており、太平洋戦争の終戦まで満蒙開拓移民として約27万人の日本人が満州、内蒙古、華北に暮らしていたと報告されている。

『満韓ところどころ』で注目すべき点は、中国人の「身体」の描かれ方である。埠頭で見かけた中国人の労働者に対して、かなり侮蔑的な表現で身体所作を形容した一方で、豆油工場で見かけた労働者に対しては「大人なしくて、丈夫で、力があつて、よく働いて、ただ見物するのでさへ心持が好い」と述べている。また、「彼等は舌のない人間の様に黙々として、朝から晩迄、此重い豆の袋を担ぎ続けに担いで、三階へ上つては、又三階を下るのである」とも書いている。漱石は「実に美事に働きますね、且非常に静粛だ」と感心するのだが、中国人労働者たちは低賃金で働かされているのであり、物心両面で日本人に搾取されている。

西洋人の場合と同様、『満韓ところどころ』の中国人も「身体」が描かれることはあるが、「舌のない人間」のように「声」を封じられているのである。黙して語らない「身体」は、侵略者であり抑圧者である日本人に対する無言の抵抗とも解釈できる。満州の漱石は、中国人の「身体」が極めて強靱で、西洋的であることに気づかされている。例えば、馬車の前を駆ける中国人の別当に関して、「よくあんな紳士的な服装をして汗も出さずに走られる事だと思ふ位に早く走れる。尤も足も長かつた。身の丈は六尺近くある」と感嘆している。「六尺（約180cm）」という身長は、『アーロン収容所』（1962年）の著者である会田雄次が収容先で見かけたイギリス人士官の身長に匹敵する。満州での見聞は、東洋に対する漱石のロンドンでの認識を大きく覆すものだったのである。実際、漱石は中国人の強健な身体に度々圧倒されている。『オリエンタリズム』（1978年）の著者エドワード・サイードは、「西洋」は「東洋」を常に保護や支配が必要な対象とみなしてきたと述べているが、満州の漱石が発見した中国は極めて屈強な「東洋」の姿だったのである。別な言い方をすれば、「西洋」のオリエンタリズムを踏襲して、アジアの国々に帝国主義を行使しようとしていた日本にとって、中国は保護すべき弱者ではなく、むしろ従属を拒む強者として立ちはだかったのである。

満州に滞在中、身体的に最も惨めな思いをしたのは漱石自身だったに違いない。作中、胃痛

や腹痛に関する描写は多く、日本から持参した薬を服用するが全く効果が認められない。頑健な身体を持ち主である中国人と胃弱の漱石の描写は対照的である。「身体」は管理できるものだと思っていたはずが、漱石は終始「身体」の抵抗^{レジスタンス}に遭っていたのである。さらに、「心」は国家から自由だと思っていたはずだが、「心」も容易に管理されやすく、漱石は大日本帝国という支配者側の人間として、満州に暮らす中国人を眺めていたと言わざるを得ない。

むすび

『ポストモダン性の条件』（1990年）の著者であるデヴィッド・ハーヴェイは、「今日、食料品から食習慣、音楽、テレビ、エンターテインメント、映画にいたるまでのあらゆる経験を通して、世界の地理はシミュラクルとして、実際に自分が行かなくとも想像的に経験されうようになった」と述べている。ここでいう「シミュラクル（simulacre）」とは、フランスの思想家ボードリヤールの用語で、「オリジナルとコピーとの違いを見分けることがほとんど不可能である状態」（ハーヴェイ）を意味している。現代では、漱石のように海外渡航をせずとも、オンライン上で現地の雰囲気十分に楽しむことができ、現地の人々と実際につながり会話することも可能である。だが、本当に「オリジナルとコピー」は同じものなのだろうか。

漱石は「頭」や「身体」に対して「心」の優位性を描いた作家であると先述したが、「心」の不調は、「身体」機能を低下させ、「頭」を疲弊させ、結果として日常生活に支障をきたすようになる。漱石はロンドンや満州の異文化体験を通じて、ある意味において「頭」や「身体」、「心」の機能不全を経験したと言える。こうした経験は、日本を離れてこそ可能であり、漱石という作家の誕生と創作活動においては不可欠な出来事だったと言える。英国から帰国する半年ほど前のことだが、漱石は妻宛の手紙（1902年4月17日）に「日本に帰りての第一の楽しみは蕎麦を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる縁側に寝ころんで庭でも見る是が願に候」と書いており、海外で暮らしたことのある者なら漱石に親近感を覚えるであろう。

「名づけ」は対象を差異化し、定義することでもある。「命名」は学問にとって重要かつ基礎的な作業であるが、時に偏見を生み、誤った認識を助長してしまう危険性もある。例えば、漱石が拘泥した「西洋人」や「東洋人」、「中国人」や「日本人」といった人種の区別も例外ではない。そして、一度「命名」されると、その定義に従って物事を判断しがちで、定義から逸脱する事象があったとしても、「名づけ」や認識が修正されることは少ない。修正のためには、新たな知見や経験が不可欠なのである。それこそが行動するリベラルアーツ教育の神髄であるとも言えよう。

参考文献

- 会田雄次『アーロン収容所 西欧ヒューマニズムの限界』中公新書、1999年〔初版は1962年〕
- 荒正人『漱石研究年表 増補改訂』集英社、1984年
- 一柳廣孝『催眠術の日本近代』青弓社、1997年
- 越智重明『晋書』中国古典新書、明德出版社、1990年〔初版は1970年〕
- 小森陽一『漱石を読みなおす』岩波書店、2016年
- サイード、エドワード『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社、1986年〔原書は1978年〕
- セルトー、ミシェル・ド『日常実践のポイエティック』山田登世子訳、国文社、1987年〔原書は1980年〕
- セルトー、ミシェル・ド『文化の政治学』山田登世子訳、岩波書店、1990年〔原書は1974年〕
- 夏目鏡子『漱石の思ひ出』岩波書店、1929年
- 夏目漱石『定本 漱石全集』全28巻、別巻1巻、岩波書店、2016-20年
- ハーヴェイ、デヴィッド『ポストモダニティの条件』吉原直樹訳、青木書店、1999年〔原書は1990年〕
- 三浦雅士『身体の零度 何が近代を成立させたか』講談社、1994年
- メルロ＝ポンティ、モーリス『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982年〔原書は1945年〕
- 養老孟司『身体の文学史』新潮社、1997年

*引用に当たっては、旧字や旧仮名遣い、ルビや傍点などの表記を一部修正した。

次の問題（１－４０）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを１つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (H)

☐ a ☐ b ☒ c ☐ d

- １． 漱石のロンドンでの散歩について、資料に最も適合するものを選びなさい。
- a. 気が滅入ることの多かった漱石は、公園で植物の成長の様子を見て慰められることにより、英国留学期間を通じて気晴らしを与えられた。
 - b. セント・ポール大聖堂の巨大なドームを見物したほぼ１週間後に、漱石は同じドームを望見することのできるハムステッド・ヒースを訪れた。
 - c. ハムステッド・ヒースを訪れた際に、水夫として日本に住んだ経験のある巡査に出会い、その人が愉快的な性格の人であることを漱石は褒めた。
 - d. ロンドンの中心部を歩いていると、日本人である漱石は大変珍しがられ、日本人であるのかそれとも中国人であるのかとしきりに尋ねられた。
- ２． 漱石が「ハムステッド・ヒース」を好んだ理由を筆者の考えに即して選びなさい。
- a. グレーター・ロンドンの周辺で、煙害などの環境問題が無かったから。
 - b. ロンドンの中心部に比べ、閑静な住宅街の中に位置していたから。
 - c. 日本を良く知る巡査に会い、日本人の誇りを取り戻すことができたから。
 - d. グレーター・ロンドンの最高所で、都市を一望することができたから。

3. ロンドンの地理について、資料に最も適合するものを選びなさい。
- a. 「グレート・ロンドン」は、「シティ」と「ウェスト・エンド」と「サウス・バンク」とに三分割される。
 - b. 漱石が散歩したハムステッド・ヒースは、「グレート・ロンドン」の中心部にあ
る緑豊かな住宅地である。
 - c. バッキンガム宮殿および国会議事堂は「セントラル・ロンドン」に属するが、「シ
ティ」には属さない。
 - d. ハムステッド・ヒースは「セントラル・ロンドン」の南側にあり、デンマーク・ヒ
ルと似た立地である。
4. ミシェル・ド・セルトーは『日常実践のポイエティーク』の中で、「都市システム」
と都市の中を「歩く行為」との関係を「ラング（言語体系）」と「パロール（個別的発
話）」との関係に喩えている。それに関して最もふさわしいものを選びなさい。
- a. 時間をかけて様々な道を歩くことは言語の通時的な変遷と似ており、歩く前にこれ
からたどるべき道を瞬時に思い描くことは言語の共時的な体系と比較しうる。
 - b. 都市を歩くことにより「場を失う」ことは未習得の言語表現を聞いて戸惑うことに、
「^フ「^ロ「^ー「^{フル}自分のもの」を探することは自分なりの表現方法を試すことに類似する。
 - c. 自分の位置を中心としてより身近にある個々の発話が「ここ」に、より遠方にある
言語体系が「あそこ」に当たり、人はその中間の「^フ「^ロ「^ー「^{フル}自分のもの」を探し求める。
 - d. 言葉を発することにより文法を習得するように、歩くことにより都市の地理が身に
つく。また新しい言い回しは通ったことのない道順を進むことと似ている。
5. 筆者は「度重なる下宿の引越」の理由をどのように解釈しているか。筆者の考えに最も
即しているものを選びなさい。
- a. 「自分のもの」と呼べる居場所が容易に見つからなかったから。
 - b. 大都市では家賃が高く生活費を少しでも節約したかったから。
 - c. 都市の中心部より閑静な郊外の住宅地が好きだったから。
 - d. 公園が近くにある緑の多い住環境を重視して探していたから。

6. ジグムント・フロイト (1856–1939) は、人間精神の無意識の領域に注目し精神分析学に多大な貢献をなした。フロイトとロンドンの関係について、筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. フロイトが意識の周辺にある無意識の重要性を人々に訴えたために迫害され、診療所をロンドンの中心部の「シティ」から離れた周辺にあるハムステッドに移したことには彼の意図が反映されていると思われる。
 - b. 漱石が到着した時期にフロイトがロンドンに住みながら出版した『夢判断』と、漱石が帰国数年後に出版した『夢十夜』という二冊のタイトルは、両者が無意識の領域に属する夢に関心を持ったことに関連すると思われる。
 - c. 人間の意識の周辺である無意識の領域に注目したフロイトが治療を行なった場所が、「自我」に当たると言えるロンドンの中心部の「シティ」ではなく、その周辺の地であったことは偶然ではなかったと思われる。
 - d. 漱石が散歩の範囲を中心部の公園からロンドン周辺部に広げ、フロイトがロンドン中心部からその周辺部に診療所を移したことは、両者が人間の意識と街の中心を、無意識と街の周辺部を対応させたことの反映と思われる。
7. 漱石にとっての「シティ (自我)」とは何を象徴しているのか。筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. 文部省第一回給費留学生
 - b. 高等教育を受けた知識人
 - c. 東洋の覇者としての日本人
 - d. 東京帝国大学の英語講師

8. 「自らの身体に向けられる『西洋人』の眼差しを内在化させられたこと」の内容について、資料に最も適合するものを選びなさい。

- a. 漱石は自分の姿が映る大きなサイズの鏡に驚愕し、このような工業製品をロンドン市中の至る所に設置できる経済力や技術力の必要性を強く感じ、日本の西洋化に心から賛同するようになった。
- b. 漱石は肌の色や背丈などについてコンプレックスを持った時期もあったが、ロンドンの人々は日本人の存在にそれほど注意を払っていないことに気づき、東洋人としての劣等感から解放された。
- c. 漱石は街を歩いているときに大きな鏡に映った自分の姿を見る経験などにより、肌の色や背丈や顔の特徴などの点について、西洋人が自分をどのように見ているかを強く意識するようになった。
- d. 漱石は英国人たちから、田舎者であり山からおりてきた猿のようだと嘲られて憂鬱になったが、「西洋人」の眼差しを受け入れて、そのように見なされるのももっともだと諦めるようになった。

9. 漱石のイギリス滞在中までの時期における、東アジア地域の情勢に関わる重要な出来事の順序として正しいものを選びなさい。

- a. 義和団事件→日清戦争→三国干渉→日英同盟締結
- b. 日清戦争→三国干渉→義和団事件→日英同盟締結
- c. 三国干渉→義和団事件→日清戦争→日英同盟締結
- d. 日清戦争→義和団事件→三国干渉→日英同盟締結

10. ロンドンの漱石はどのような「地理的座標軸」を描いていたと思われるか。筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. 英国に在住する日本人と中国人は、ともに「東洋」と「周縁」が交差する座標平面に位置している。
 - b. 日本人は「東洋」と「中心」が交差する座標平面に、英国人は「西洋」と「中心」が交差する座標平面に位置している。
 - c. 日英同盟を結んだ英国人と日本人は、「西洋」と「中心」が交差する座標平面に位置している。
 - d. 中国人は「東洋」と「周縁」が交差する座標平面に、日本人は「東洋」と「中心」が交差する座標平面に位置している。
11. 20 世紀を迎える時期の英国国内には「重苦しい雰囲気」が漂っていた」とされるが、これについて資料に最も適合するものを選びなさい。
- a. 20 世紀を迎える時期に起きた労働者階級と資本家階級の対立は産業革命の進展を停滞させ、第 2 次ボア戦争は植民地主義の限界を示したため、人々は失望しこれらの出来事とは関係のない自由貿易の発展のみに期待を寄せるようになった。
 - b. 手袋を買った時に、それが不吉な色とされる黒だったために「ひどく縁起の悪い始まり方をした」と店員から言われたことは単なる偶然ではなく、20 世紀初頭の英国の全体的な経済的・軍事的な状況と符合するものと漱石は考えた。
 - c. 19 世紀に産業・経済面で成功し軍事力を背景に植民地を獲得した大英帝国であったが、20 世紀に入るとその繁栄に陰りが見えたため、同様にして富国強兵と植民地主義を掲げる日本の将来の行く末について英国人たちは大いに心配した。
 - d. 国内産業および海外貿易において、さらには軍事力を背景とする植民地統治においても順調であると思われたが、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて起きた国内での対立と海外での戦争は産業や経済や植民地政策の行き先に不安を投げかけた。

12. 文中の「A」に入る四字熟語を選びなさい。

- a. 泰然自若
- b. 不俱戴天
- c. 岡目八目
- d. 驚天動地

13. 「漱石の懸念」について、筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。

- a. 西洋と東洋の対立が深まり、近い将来、周縁国としての日本も西洋諸国の侵略を受けるかもしれない。
- b. 日本とロシアが戦争になっても、大英帝国から軍事的な援助を受けることは難しいかもしれない。
- c. 日本と大英帝国は同盟国ではあるが、将来、日本が中国と同じ境遇に置かれる危険性を否定できない。
- d. 日本は大英帝国を手本とし植民地政策を推し進めた結果、衰退を招くに違いない。

14. 「鼯鼠の引き倒し」の意味として、正しいものを選びなさい。

- a. 周囲から羨望されるほど、誰かを特別扱いすること
- b. 特別扱いすることで、逆に不利益をもたらしてしまうこと
- c. 相手の欠点を見つけて、高い地位から引きずり下ろすこと
- d. 特別扱いを繰り返し、相手から疎まれてしまうこと

15. ミシェル・ド・セルトーが『文化の政治学』の中で青年について論じたことと、夏目漱石の『三四郎』および森鷗外の『青年』との関連性について、資料に最も適合するものを選びなさい。
- a. セルトーが19世紀における青年の把握のされ方を指摘したのに対し、『三四郎』と『青年』は20世紀日本での特殊な事情を取り上げており、セルトーが指摘しなかった権力の中央集中という新たな面を筆者は指摘する。
 - b. セルトーは19世紀のヨーロッパに詩的な「青春」というキャラクターが生み出されたことを指摘したが、『三四郎』と『青年』の主人公たちは文学用語である共通語を習得中であるところがセルトーの指摘と異なる。
 - c. 漱石の『三四郎』の主人公はセルトーが指摘した19世紀の「青年」に当てはまるが、それに対抗する作品として書かれた鷗外の『青年』には対極的な青年が主人公となっており、セルトーの指摘は当てはまらない。
 - d. 『三四郎』と『青年』の主人公である青年たちはセルトーが指摘した19世紀に誕生した「青年」の類型に当てはまるとともに、若者たちにとってこれらの小説は都会での生活を知りまた共通語を学ぶ手立てともなった。
16. 「言語による中央集権化」に当てはまるものを選びなさい。
- a. 小学校の英語教育の必修化
 - b. 石川啄木のローマ字日記
 - c. 植民地における日本語教育
 - d. 歴史的仮名遣いによる表記

17. 『三四郎』作品内の「囚はれちや駄目だ」という男性の言葉が「漱石自身に向けられた自戒の言葉でもあったと言って良い」とされている。このことについて筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. 日本の軍事的成功に目を奪われて、永続的な領土の拡張という幻想を抱くのではなく、古来の日本領土のみで完結する経済政策を推進すべきという自戒
 - b. 西洋的な植民地主義の領土拡大による発展ではなく、頭の中の思考の広大さに注目し、東洋的な精神主義に立ち帰り心の豊かさを求めるべきという自戒
 - c. 西洋人のあり方を中心に置き、それを模範として東洋人である自分のあり方をとらえる考え方に束縛されずに、より広い視点から考えるべきという自戒
 - d. 日本を第一として日本の国益のみに役立つことを求めるのではなく、西洋と東洋の区別を超越して世界全人類の幸福を求める慈悲を持つべきという自戒
18. 漱石が実際に行った以下の事柄の中で、「他者への印象を操作」に当てはまるものを選びなさい。
- a. 肖像写真から顔の「痘痕^{あばた}」を消すという修正を行った。
 - b. 体操器具を購入して自らの身体を鍛えることに熱中した。
 - c. 魚よりも肉食を好み下宿先に客を招いて肉料理を振舞った。
 - d. 生活費を切り詰め奨学金の多くを洋書の購入に費やした。
19. 「漱石枕流」の意味として、正しいものを選びなさい。
- a. 自分の間違いを武器に、話術で相手を攻撃すること。
 - b. 自分の間違いに気づくが、別の間違いを付け加えること。
 - c. 自分の間違いを認めないで、負け惜しみの強いこと。
 - d. 自分の間違いを別の話題にすり替え、その場を逃れること。

20. 『吾輩は猫である』に関して、資料に最も適合するものを選びなさい。

- a. 漱石は東京帝国大学を辞職した後すぐに『吾輩は猫である』を完成し、この作品の成功により作家として有名になった点において、この作品によって漱石は職業作家になることを決意したと言える。
- b. 人間たちが名前を持ち職業や身分と結びつけられているのに比して、無名である猫が自由に移動し人々や社会を辛辣に批判するところに、名前や身分にとらわれずに考え行動する解放感が表れている。
- c. 猫の飼い主の英語教師の名前である「珍野苦沙弥」が、実在しないことの明らかなユーモラスな名前となっているところに、現実的な「名称」にとらわれずに自由に名前を創造する快感が表れている。
- d. 猫が成金の実業家の名前を「金田」と名づけ、その娘を「富子」と名づけたところに、ひとりひとりの人間の社会的地位を把握し、人間社会を辛辣に容赦無くありのままに批評する様子が表れている。

21. 旧約聖書創世記（2章19節）には「名づけ」に関する以下の記述がある。

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がどう呼ぶかを見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。（新共同訳）

この一節の解釈として、資料に引用されているモーリス・メルロ＝ポンティの『知覚の現象学』における呼称に関する見解に最も適合するものを選びなさい。

- a. 人は生き物が神によって創造されたという事実をまず再認識してから後に生き物を名づけるのではなく、実際は神がそれぞれの生き物の名前を暗示しており、人はその暗示を再認して名づける。
- b. 人は名づけることによってそれぞれの生き物を固有の本質を持った独立の存在として把握するのであり、名づけられたときに初めてそれが人にとって十全な意味で存在すると言うことができる。
- c. 名称は対象の本質として対象の中に宿っているので、神がすでに決めた名称が個々の生き物の中に隠されている。人は生き物の色彩や形を手がかりとして隠されている名前を想像して名づける。
- d. 個々の生き物はそれが種として成立した時点がその存在の始まりであるので、人が個々の生き物を名づけた時点ではなく、神が創造した時点からそれらの生き物が存在すると言うことができる。

22. 「言霊思想」に該当するものを選びなさい。

- a. 「漱石」というペンネーム
- b. 資産家の名字の「金田」
- c. 「効率」や「遅刻」といった概念
- d. 漱石の本名の「金之助」

23. 「言霊」を含む万葉集の歌の一つに以下のものがある。

しきしまの 大和の国は 言霊の 助くる国ぞ ま幸^{さき}くありこそ

この歌は遣唐使として遣わされる人物に向けられた送別の歌として作られたという見解がある。そうだとすると以下のうち最もふさわしい解釈を選びなさい。

- a. 遣唐使が大陸に渡っている間に、言霊の働きによって大和の国が安全無事であることを祈願する。
- b. 枕詞の「しきしまの」が「大和の国」を修飾し、遣唐使の出身国の日本の高貴な由来を強調する。
- c. 人々が幸せな気分で遣唐使を送り出すにあたり、送別の宴を言霊が手助けしてくれることを切望する。
- d. 遣唐使の安全の願いを口に出して述べることにより、言霊が働いて実現してくれることを祈念する。

24. [削除]

25. 明治時代に新しく名づけられたものについて、資料に最も適合するものを選びなさい。

- a. 「小麦」と「大麦」の区別がなされるようになった理由は、大麦が日本に輸入され始めたため英語の wheat と barley を区別する必要性が生じたことである。
- b. 儒教的な道德思想のもとでは人々が用事に遅れることは稀であったが、明治時代の時間意識の変革により急増したために「遅刻」という言葉が作られた。
- c. 工場での「効率」が意識されるようになったことには、定時法の採用に伴い時計が設置され、時間が貨幣価値と結びつけられるようになった背景がある。
- d. 時間を測る単純な道具に代わり工場で生産される高価な「時計」が明治末期には一般家庭にも普及したために、時間と貨幣が等価であるとみなされるようになった。

26. 日本の植物分類学を樹立した牧野富太郎の功績に関して、本文の「名づけ」に対する考え方に最も適合するものを選びなさい。
- a. 研究の集大成として刊行した『牧野日本植物図鑑』（北隆館、1940 年）には、3,206 種の植物が学名だけでなく絵と解説とともに収録されている。牧野の植物画は非常に緻密で、植物の特徴が分かりやすいように茎の断面や花の内部、根の様子などの情報が掲載されている。
 - b. 牧野は『植物記』（桜井書店、1943 年）において、「植物研究の第一歩は、その名称をしらべることである」と述べている。94 歳で他界するまで、自身で全国各地を歩いて調査し、「雑草」としか思われていなかったものを含む約 1,500 種類の植物に命名し、その存在を周知させた。
 - c. 日本の植物学の発展のためには、基準となる植物標本が必要であり、明治の中頃までは、国内に基準標本が少なく、ロシアの研究者に標品を送って学名を決定していた。牧野は日本国内でも独自に研究活動ができるように、積極的に全国の植物を採集し標本を作製した。
 - d. 「植物に感謝せよ」（『植物学九十年』1956 年）という随筆の中で、牧野は「植物は人間が居なくても少しも構わずに生活するが人間は植物がなくては生活のできぬことである」と書いており、人間が植物から受ける様々な生態系サービス、即ち恩恵について言及している。

27. 養老孟司の『身体の文学史』における指摘と明治期の運動会との関連について、筆者の考えに最も適合するものを選びなさい。

- a. 運動会に日英同盟を思い起こさせる旗が飾られ、競技の結果が計測され記録され掲示されることは、この時代に身体が軍事的および医学的に管理されたことの反映であると考えられる。
- b. 三四郎が政治的・軍事的な三色旗を見て、それが運動会とどのような関係を持つのか不思議に思うという心理的な反応を示すことに、文学が心理主義の伝統に属することが反映されている。
- c. 運動会の起源は海軍兵学寮での競闘遊戯会に遡るが、東京大学での最初の正式な運動会では軍事的な意味合いはなくなり、国旗が飾られる華々しい純粋なスポーツの祭典へと変容した。
- d. 文学は心理を扱い軍と病院が身体を扱うという二分法に対して、漱石の『三四郎』は例外となっており、この作品には主人公の心の動きと運動会での身体管理がともに盛り込まれている。

28. 明治政府による「富国強兵」政策の例として、最もふさわしいものを選びなさい。

- a. 尊王攘夷運動の高揚
- b. 学制による小学校設置
- c. 日米修好通商条約の締結
- d. 自由民権運動の進展

29. 文中の「B」に入る語として、最もふさわしいものを選びなさい。

- a. 不透明性
- b. 柔軟性
- c. 脆弱性
- d. 不確実性

30. 『こころ』において「先生」は自らの「心」に裏切られたとあるが、このことに関して資料に最も適合するものを選びなさい。

- a. 人々が「心」の不可解さや流動性に注目する中で、「先生」は自分の「心」を掌握していると自負していたが、自分も意思決定の際に「心」の影響を受ける普通の人間であるという現実直面して当惑している。
- b. 「先生」は自分は人から何かを奪う行為を行うような悪人ではないと「頭」では理解していたが、不可解で流動的な「心」に影響されて犯罪者となってしまったという自責の念に苛まれている。
- c. 「先生」は冷静に判断して親友を大切に作る行動をとるべきであると「頭」では思っていたが、自分の「心」に動かされて親友が恋慕するお嬢さんを奪うという行動をとってしまったことを後悔している。
- d. 「先生」は自分の恋人であるお嬢さんを恋慕する親友に正々堂々と抗議しようと「頭」では考えたが、自分の「心」に押し流されてお嬢さんを奪うという姑息^{こそく}な手段をとったことを悔やんでいる。

31. 文中の C に入る語として、最もふさわしいものを選びなさい。

- a. つまり
- b. 他方
- c. なぜなら
- d. 実は

32. 漱石の作品について、刊行年順に正しく並んでいるものを選びなさい。

- a. 『倫敦消息』→『文学論』→『吾輩は猫である』→『満韓ところどころ』
- b. 『三四郎』→『それから』→『こころ』→『満韓ところどころ』
- c. 『文学論』→『倫敦消息』→『吾輩は猫である』→『こころ』
- d. 『吾輩は猫である』→『文学論』→『三四郎』→『こころ』

33. 『満韓ところどころ』に関して確実に言えることは何か。正しいものを以下の中から選びなさい。
- a. 『満韓ところどころ』と満州への移民者数の増加との間に、明確な因果関係を指摘することはできない。
 - b. 自主中立であるべき「新聞屋」が『満韓ところどころ』を発表した倫理的な責任を問い発禁処分にすべきである。
 - c. 『満韓ところどころ』の発表によって、読者は中国人に対する差別的な意識をより強固なものにしてしまった。
 - d. 『満韓ところどころ』は内地の日本人に中国大陆での生活の魅力を伝え、満蒙開拓移民の増加につながった。
34. 『満韓ところどころ』における中国人の封じられた「声」とは何か。筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. 拒絶
 - b. 絶望
 - c. 悲哀
 - d. 憤怒
35. 満州における漱石の世界認識は、「身体」という視点から、どのように修正されたと考えられるか。筆者の考えに最も即しているものを選びなさい。
- a. 地理的には中国は「東洋」に分類されるが、中国人は「身体」的には「西洋」に近く、日本人は「身体」的には劣勢な「周縁」に置かれている。
 - b. 日本人も中国人も「東洋」と「周縁」が交差する空間に位置しているが、「身体」的には中国人の方が「西洋」に近い「中心」に位置している。
 - c. 中国人は「東洋」の「周縁」だが、日本人は「身体」的には同じく「周縁」でも、日露戦争に勝利したことで「西洋」の「中心」に位置している。
 - d. 満鉄を経営する日本人は「東洋」の「中心」であり、これに対して屈強な「身体」を持つ中国人は「西洋」の「周縁」に位置している。

36. 漱石が英国滞在に関して書いたことと、満州訪問に関して書いたこととの比較に関して、資料に最も適合するものを選びなさい。
- a. 英国滞在の記述の表層にある日本人としての自分の劣等感の深層には、学問的には自分の方が優れているという無意識の優越感があり、満州訪問の記述においてはその優越感が表層に浮かび上がり、中国人に対するあからさまな軽蔑的言葉遣いや傲慢な態度として表れている。
 - b. 英国滞在の記述には西洋人との対比において日本人も中国人も東洋人であるという意識が強く表れ、また中国人への敬意や日清戦争後の中国人の境遇への同情を示す文章も含まれるが、満州訪問の記述には中国人に対する侮蔑的表現が目立ち中国人に対する優越感が感じられる。
 - c. 英国滞在の記述が中国人に同情的なのは、留学が日清戦争の賠償金によって可能になったことに本心から恩義を感じたからであり、満州訪問の記述が中国人に対して侮蔑的なのは招待者である満鉄総裁中村是公の中国人に対する優越感を表面的に反映したもので、漱石の本心ではない。
 - d. 英国滞在の記述では、初期の劣等感と結びついた東洋人および日本人の定義づけを修正して、学問的な知識など自分にも優れた点があることに気がつくことができたが、満州訪問の記述では、訪問の期間が短かったこともあり、中国人を見下す当初の定義づけを修正できなかった。
37. 「頭」「身体」「心」の関係について、筆者の解釈として最もふさわしいものを選びなさい。
- a. 「頭」や「身体」は自分以外のものに管理されやすいが、個人の「心」は比較的自由であり管理されにくい。
 - b. 近代化の過程では「頭」の発達や「身体」の改造が重視され、一方で「心」の存在は軽視されてきた。
 - c. 個人の「心」は自由であるべきだが、「頭」や「身体」と同様に国家や社会情勢から強い影響を受けることがある。
 - d. 「頭」や「心」の存在は明治時代に文学者たちによって発見され、「身体」の管理は軍隊の領分となった。

38. 漱石のように実際に海外渡航をしなくても、現代ではオンライン上で現地の雰囲気を十分に楽しむことができることを指摘した上で、「オリジナルとコピー」は同じものなのかと筆者は問いかけている。これに関して筆者の考えに最も適合するものを選びなさい。

- a. ハーヴェイによるシミュラクルの定義では「オリジナルとコピーとの違いを見分けることがほとんど不可能である状態」とされており、シミュラクルであるオンラインツアーも現実の旅行と同じとすることができる。
- b. 異文化に触れての心と身体と頭にわたる不調や帰国後に日本でしかできないことへの願望は、実際に現地を訪れる旅行によってのみ体験できることなので、オンラインでの「旅行」は実際の旅行と同じものとは言えない。
- c. 漱石は海外での体験を書簡や手記や新聞記事などのメディアを用いて生き生きと描写し伝えたとはいえ、オンラインによる「旅行」では動画と音声など格段に大容量の情報によって伝えられるため同じものとは言えない。
- d. レストランの異国料理は日本風にアレンジされ、映画やテレビでの異国の様子は製作者の意図を反映したものであるように、オンラインでの海外体験にも情報にバイアスがかかるため実際の旅行と同じものとは言えない。

39. 「命名」が偏見や誤った認識となり得る例に当てはまらないものを選びなさい。

- a. 『種の起源』を適用した社会ダーウィニズム
- b. ヒトゲノムの遺伝情報の発見
- c. 血液型による職業適性診断
- d. アメリカ先住民族を指すインディアン

40. 資料全体のタイトルとして最もふさわしいものを選びなさい。

- a. 夏目漱石における中心と周辺
- b. 夏目漱石の異文化体験
- c. 夏目漱石における価値観の変遷
- d. 夏目漱石の創作活動

